

# ひふみ神示 第三卷 富士＝普字の巻 全 廿七帖

## 第一帖 (八一)

道はいくらもなるなれど、どの道通っても、よいと申すのは、悪のやり方ぞ、元の道は一つぞ、初めから元の世の道、変らぬ道があれば、よいと申してあるが。どんなことしても我さへたてばよいように申してあるが、それが悪の深き腹の一厘ぞ。元の道は初めの道、神のなれる道、神のなかのゝなる初め、ゝは光の真中 ㊦ は四の道、此の事、気をつく臣民ないなれど。「一が二」わかる奥の道、身魂掃除すれば此のことわかるのぞ、身魂磨き第一ぞ。八月十日、㊦ の一二 ㊦。

## 第二帖 (八二)

か一の八マに立ちて、<sup>ひ ふ</sup>一れ二りて祓ひて呉れよ、ひつくの神に事へている臣民、代る代るこの御役につとめて呉れよ。今は分かるまいなれど結構な御役ぞ。<sup>ふで</sup>この神示腹の中に入れて置いてくれと申すに、言ふ事きく臣民少ないが、今に後悔するのが、よく分りてあるから神はくどう気つけて置くのぞ、読めば読むほど神徳あるぞ、どんな事でも分かる様にしてあるぞ、言ふことかかねば一度は種だけにして、根も葉も枯らして仕まうて、この世の大掃除せねばならんから、種のある内に気つけて居れど、気つかねば気の毒出来るぞ。<sup>まつり</sup>今度の祭典 御苦勞でありたぞ、神界では神々様大変の御喜びぞ、雨の神、風の神殿ことに御喜びになりたぞ。此の大掃除一応やんだと安堵する。この時、<sup>ニニ</sup>富士鳴門がひっくり返るぞ、早やう改心して呉れよ。八月の十一日、㊦ のひつくの ㊦。

## 第三帖 (八三)

メリカもギリスは更なり、ドイツもイタリアもオロシヤも外国はみな一つになりて神の国に攻め寄せて来るから、その覚悟で用意しておけよ。神界ではその戦の最中ぞ。学と神力との戦と申しておろがな、どこから何んなこと出来るか。臣民には分かるまいがな、一寸先きも見えぬほど曇りて居りて、それで神の臣民と思うてあるのか、畜生にも劣りてあるぞ。まだまだわるくなって来るから、まだまだ落ち沈まねば本当の改心出来ん臣民沢山あるぞ。<sup>おん</sup>玉とは御魂ぞ、<sup>みくさ</sup>鏡とは内に動く御力ぞ、<sup>かむたから</sup>剣とは外に動く御力ぞ、これを三種の神宝 と申すぞ。今は玉がなくなつてあるのぞ、鏡と剣だけぞ、それで世が治まると思つてあるが、<sup>四</sup>肝腎の真中ないぞ、それでちりちりばらばらぞ。アとヤとワの詞の元要るぞと申してあるが、この道理分らんか、剣と鏡だけでは戦勝てんぞ、それで早う身魂磨いて

呉れと申してあるのぞ。上下でないぞ、上下に引繰り返すぞ、もう神待たれんところまで来てゐるぞ、身魂みがけたら、何んな所で何んなことしてゐても心配ないぞ、神界の都にはあくが改めて来てゐるのぞ。八月の十二日、㊦のひつくの㊦。

#### 第四帖（八四）

ひふみ みよいつ  
一二三の仕組が済みたら三四五の仕組ぞと申してありたが、世の本の仕組は三四五の  
みろく みろく けもの  
仕組から五六七の仕組となるのぞ、五六七の仕組とは弥勒の仕組のことぞ、獣と臣民  
わか  
ハッキリ判りたら、それぞれの本性出すのぞ、今度は万劫末代のことぞ、気の毒出来るから洗濯大切と申してあるのぞ。今度お役きまりたらそのままいつまでも続くのぞから、  
ふで  
臣民よくこの神示よみておいて呉れよ。八月十三日、㊦のひつくのか三。

#### 第五帖（八五）

喰うものないと申して臣民不足申してゐるが、まだまだ少なくなりて、一時は喰ふ物も  
ぎょう そば  
飲む物もなくなるのぞ、何事も行であるから喜んで行して下されよ。滝に打たれ、蕎麦粉喰うて行者は行してゐるが、断食する行者もあるが、今度の行は世界の臣民みな二度とない行であるから、厳しいのぞ、この行出来る人と、よう我慢出来ない人とあるぞ、この行出来ねば灰にするより外ないのぞ、今度の御用に使ふ臣民はげしき行さして神うつるのぞ。今の神の力は何も出ては居らぬのぞ。この世のことは神と臣民と一つになりて出来る  
せ  
と申してあるがな、早く身魂みがいて下されよ。外国は○、神の国はㄣと申してあるが、ㄣは神ぎ、○は臣民ぞ、○ばかりでも何も出来ぬ、ㄣばかりでもこの世の事は何も  
成就せん  
のぞ、それで神かかれるやうに早う大洗濯して呉れと申してゐるのぞ、神急けるぞ、この御用大切ぞ、神かかれる肉体沢山要るのぞ。今度の行は○を綺麗にする行ぞ、掃除出来た臣民から楽になるのぞ。どこに居りても掃除出来た臣民から、よき御用に使って、神から御礼申して、末代名の残る手柄立てさすぞ。神の臣民、掃除洗濯出来たらこの戦は勝つので、今は一分もないぞ。一厘もないぞ、これで神国の民と申して威張ってゐるが、足許からビックリ箱があいて、四ツん這ひになっても助からぬことになるぞ。穴掘りて逃げても、土もぐってゐても灰になる身魂は灰ぞ、どこにゐても助ける臣民行って助けるぞ、神が助けるのでないぞ、神助かるのぞ、臣民も神も一緒に助かるのぞ、この道理よく腹に入れて呉れよ、この道理分りたら神の仕組はだんだん分りて来て、何といふ有難い事からと心がいつも春になるぞ。八月の十四日の朝、㊦のひつくの㊦。

## 第六帖（八六）

今は善の神の力弱いから善の臣民苦しんでゐるが、今しばらくの辛抱ぞ、悪神総がかりで善の肉体にとりかからうとしてゐるからよほどフンドシしめてかからんと負けるぞ。親や子に悪の神かかりて苦しい立場にして悪の思ふ通りにする仕組たててゐるから気をつけて呉れよ。神の、も一つ上の神の世の、も一つ上の神の世の、も一つ上の神の世は戦済みよいつみろくんでゐるぞ、三四五から五六七の世になれば天地光りて何もかも見えすくぞ。八月のこと、八月の世界のこと、よく気づけて置いて呉れよ、いよいよ世が迫りて来ると、やり直し出来んと申してあるがな。いつも剣の下にゐる気持で心ひき締めて居りて呉れよ、臣民口でたべる物ばかりで生きてゐるのではないぞ。八月の十五日、ひつく㊶と㊷のひつ九のか三するさすぞ。

## 第七帖（八七）

悪の世であるから悪の臣民世に出てござるぞ、善の世にグレンと引繰り返ると申すのは善の臣民の世になることぞ。今は悪が栄えてゐるのざが、この世では人間のくさき世界が一番おくれてゐるのざぞ、草木はそれぞれに神のみことのまにまになつてゐるぞ。一本の大根でも一粒の米でも何でも貴くなつたであるが、一筋の糸でも光出てきたであるがな、臣民が本当のつとめしたなら、どんなに尊いか、今の臣民には見当とれまいがな、神が御礼申すほどに尊い仕事出来る身魂ぞ、殊に神の国の臣民みな、まことの光あらはしたなら、天地が輝いて悪の身魂は目あいて居れんことになるぞ。結構な血筋に生れてゐながら、今の姿は何事ぞ、神はいつまでも待てんから、いつ気の毒出来るか知れんぞ。戦恐れてゐるが臣民の戦位こわ、何が怖いので、それより己の心に巣くうてる悪のみたまが怖いぞ。八月十六日、㊸のひつ九のか三。

## 第八帖（八八）

山は神ぞ、川は神ぞ、海も神ぞ、雨も神、風も神ぞ、天地みな神ぞ、草木も神ぞ、神祀れと申すのは神にまつらふことと申してあるが、神々まつり合はすことぞ、皆何もかも祭りあつた姿が神の姿、神の心ぞ。みなまつれば何も足らんことないぞ、余ることないぞ、これが神国の姿ぞ、物足らぬ物足らぬと臣民泣いてゐるが、足らぬのではないぞ、足らぬと思ふてゐるが、余つてゐるのではないか、上の役人どの、まづ神祀れ、神祀りて神心かみとなりて神の政治せよ、戦などは何でもなく梟けりがつくぞ。八月十七日、㊹の一二のか三。

## 第九帖（八九）

神界は七つに分かれてゐるぞ、天つ国三つ、地<sup>つち</sup>の国三つ、その間に一つ、天国が上中下の三段、地国も上中下の三段、中界の七つぞ、その一つ一つがまた七つに分かれてゐるのぞ、その一つがまた七つずつに分かれてゐるぞ。今の世は地獄の二段目ぞ、まだ一段下があるぞ、一度はおこまで下がるのぞ、今一苦勞あると、くどう申してあることは、そこまで落ちることぞ、地獄の三段目まで落ちたら、もう人の住めん所ざから、悪魔と神ばかりの世にばかりなるのぞ。この世は人間にまかしてゐるのざから、人間の心次第ぞ、しかし今の臣民のやうな腐った臣民ではないぞ、いつも神かかりてゐる臣民ぞ、神かかりと直ぐ分かる神かかりではなく、腹の底にシツクリと神鎮つてゐる臣民ぞ、それが人間の誠の姿ぞ。いよいよ地獄の三段目に入るから、その覚悟でゐて呉れよ、地獄の三段目に入ること<sup>おもて</sup>の表は一番の天国に通ずることぞ、神のまことの姿と悪の見られんさまと、ハッキリ出て来るのぞ、神と獣と分けると申してあるのはこのことぞ。何事も洗濯第一。八月の十八日、㊦の一二㊦。

## 第十帖（九〇）

いよいよ戦烈しくなりて喰ふものなく何もなくなり、住むこともなくなりたら行く所なくなるぞ。神の国から除かれた臣民と神の臣民と何ちらがえらいか、その時になりたらハッキリするぞ、その時になりて何うしたらよいかと申すことは神の臣民なら誰でも神が教えて手引張つてやるから、今から心配せずに神の御用なされよ、神の御用と申して自分の仕事をなまけてはならんぞ。何んな所にゐても、神がスツカリと助けてやるから、神の申すやうにして、今は戦して居りて呉れよ。てんし様御心配なさらぬ様にするのが臣民のつとめぞ。神の臣民言に<sup>こと</sup>気つけよ、江戸に攻め来たぞ。八月の十九日、㊦のひつ九の㊦。

## 第十一帖（九一）

<sup>かみつち</sup>神土は白は、「し」のつく、黄は「き」のつく、青赤は「あ」のつく、黒は「く」のつく山々里々から出て来るぞ、よく探して見よ、三尺下の土なればよいぞ、いくらでも要るだけは出てくるぞ。八月二十日、㊦のひつ九のか三。

## 第十二帖（九二）

御土は神の肉体ぞ。臣民の肉体もお土から出来てゐるのぞ、この事分りたら、お土の尊いことよく分るであろがな。これからいよいよ厳しくなるぞ、よく世の中の動き見れば分るであろが、汚れた臣民あがれぬ神の国に上がつてゐるではないか。いよいよとなりたら

神が臣民にうつりて手柄さすなれど、今では軽石のような臣民ばかりで神かかれんぞ。早う神の申すこと、よくきいて生れ赤子の心になりて神の入れものになりて呉れよ。一人改心すれば千人助かるのぞ、今度は千人力与えるぞ、何もかも悪の仕組は分りているぞ、いくらでも改めて来てござれ、神には世の本からの神の仕組してあるぞ、学や智恵でまだ神にかなふと思ふてか、神にはかなはんぞ。八月の二十一日、㊦のひつ九のか三。

### 第十三帖（九三）

何もかもてんし様のものではないか、それなのにこれは自分の家ぞ、これは自分の土地ぞと申して自分勝手にしているのが神の気にいらんぞ、一度は天地に引き上げと知らしてありたこと忘れてはならんぞ、一本の草でも神のものぞ、野から生まれたもの、山から取れたもの、海の幸もみな神に供へてから臣民いただけと申してあるわけも、それで分るであらうがな。この神示よく読みてさへ居れば病気もなくなるぞ、さう云へば今の臣民、そんな馬鹿あるかと申すがよく察して見よ、必ず病も直るぞ、それは病人の心が綺麗になるからぞ、洗濯せよ掃除せよと申せば、臣民何も分らんから、あわててゐるが、この神示よむことが洗濯や掃除の初めで終りであるぞ、神は無理は言はんぞ、神の道は無理してないぞ、よくこの神示読んで呉れよ。よめばよむほど身魂みがかれるぞ、と申しても仕事をよそにはならんぞ。臣民と申すものは馬鹿正直ざから、神示よめと申せば、神示ばかり読んだならよい様に思うてゐるが、裏も表もあるのぞ。役員よく知らしてやれよ。八月二十二日、㊦のひつ九のか三のお告。

### 第十四帖（九四）

臣民にわかる様にいふなれば、身も心も神のものざから、毎日毎日神から頂いたものと思えばよいのであるぞ、それでその身体からだをどんなにしたらよいかと云ふこと分かるであらうが、夜になれば眠ったときは神にお返ししてゐるのざと思へ、それでよく分かるであらうが。身魂みがくと申すことは、神の入れものとして神からお預かりしてゐる、神の最も尊いとことしてお扱いすることぞ。八月二十三日、㊦の一二のか三。

### 第十五帖（九五）

一二三は神食、三四五は人食、五六七は動物食、七八九は草食ぞ、九十は元に、一二三の次の食、神国弥栄ぞよ。人、三四五食に病ないぞ。八月二十四日、㊦一二㊦ふみ。

### 第十六帖（九六）

なかあらしの中の捨小舟ぞ、どこへ行くやら行かすやら、船頭さんにも分かるまい、メリカ、キリスは花道で、味方と思うた国々も、一つになりて攻めて来る、舵も權さへ折られた舟、

何うすることもなくなく、苦しい時の神頼み、それでは神も手が出せぬ、腐りたものは腐らして肥料になりと思へども、肥料にさへもならぬもの、沢山出来ておろうがな、北から攻めて来るときが、この世の終り始めなり、天にお日様一つでないぞ、二つ三つ四つ出て来たら、この世の終りと思へかし、この世の終りは神国の始めと思へ臣民よ、神々様にも知らすぞよ、神はいつでもかかれるぞ、人の用意をいそぐぞよ。八月二十四日、㊦の一二か三。

## 第十七帖（九七）

九十が大切ぞと知らしてあるがな、戦ばかりでないぞ、何もかも臣民では見当とれんことになりて来るから、上の臣民九十に気づけて呉れよ、お上に神祀りて呉れよ、神にまつらうて呉れよ、神くどう申して置くぞ、早う祀らねば間に合はんのぞぞ、神の国の山々には皆神祀れ、川々にみな神まつれ、野にもまつれ、臣民の家々にも落つる隈なく神まつれ、まつりまつりてみろく弥勒の世となるのぞ。臣民の身も神の宮となりて神まつれ、祭祀の仕方知らしてあるぞ、神は急けるぞ、八月二十五日、㊦のひつ九㊦。

## 第十八帖（九八）

神々様みなお揃ひなされて、雨の神、風の神、地震の神、岩の神、あれの神五柱七柱、八柱、十柱の神々様がチャンとお心合はしなされて、今度の仕組の御役きまりてそれぞれに働きなされることになりたよき日ぞ。辛酉はよき日と知らしてあるがな。これから一日々々烈しくなるぞ、臣民心得て置いて呉れよ、物持たぬ人、物持てる人より強くなるぞ、泥棒が多くなれば泥棒が正しいと云ふことになるぞ、理屈は悪魔と知らしてあるが、保持の神様ひどくお怒りぞ、臣民の食ひ物、足りるやうに作らしてあるに、足らぬと申してあるが、足らぬことないぞ、足らぬのは、やり方わるいのぞぞ、食ひて生くべきもので人殺すとは何事ぞ。それぞれの神様にまつはればそれぞれの事、何もかなふのぞ、神にまつらはずに、臣民の学や智恵が何になるのか、底知れてあるでないか。戦には戦の神あるぞ、お水に泣くことあるぞ、保持の神様御怒りなされてあるから早やう心入れかへてよ、この神様お怒りになれば、臣民日干しになるぞ、八月の辛酉の日、ひつくのか三さとすぞ。

## 第十九帖（九九）

神世のひみつと知らしてあるが、いよいよとなりたら地震かみなりばかりでないぞ、臣民アブンとして、これは何とした事ぞと、口あいたまま何うすることも出来んことになるのぞ、四ツン這ひになりて着る物もなく、獣となりて、這ひ廻る人と、空飛ぶやうな人と、二つにハッキリ分かりて来るぞ、獣は獣の性来いよいよ出すのぞ、火と水の災難が何んな

に恐ろしいか、今度は大なり小なり知らさなならんことになりたぞ。一時は天も地も一つにまぜこぜにするのだから、人一人も生きては居れんのぞぞ、それが済んでから、身魂みろくみがけた臣民ばかり、神が拾ひ上げて弥勒の世の臣民とするのぞ、どこへ逃げても逃げ所ないと申してあるがな、高い所から水流れるやうに時に従ひて居れよ、いばといふときには神が知らして一時は天界へ釣り上げる臣民もあるのぞぞ。人間の戦や獣の喧嘩位では何も出来んぞ、くどう気付けておくぞ、何よりも改心が第一ぞ。八月の二十六日、㊦のひつくのかみ。

## 第二十帖（一〇〇）

今のうちに草木の根や葉を日に干して貯へておけよ、保持うけもちの神様お怒りだから、九十四は五分位しか食べ物とれんから、その積りで用意して置いて呉れよ。神は気もない時から知らして置くから、この神示よく読んで居れよ。一握りの米に泣くことあると知らしてあるがな、米ばかりでないぞ、何もかも臣民もなくなるころまで行かねばならんので、臣民ばかりでないぞ、神々様さへ今度は無くなる方あるぞ。臣民と云ふものは目の先ばかりより見えんから、呑気なものであるが、いざとなりての改心は間に合はんから、くどう気つけてあるのぞ。日本ばかりでないぞ、世界中はおろか三千世界の洗濯と申してあろうがな、神にすぎりて神の申す通りにするより外には道ないぞ、それで神々様を祀りて上の御方から下々からも朝に夕に言霊が満つ世になりたら神の力現はすのぞ。江戸に先づ神まつれと、くどう申してあることよく分かるであるがな。八月の二十七日、㊦のひつ九のか三。

## 第二十一帖（一〇一）

神の申すこと何でも素直にきくやうになれば、神は何でも知らしてやるのぞ。配給のことでも統制のことも、わけなく出来るのぞ、臣民みな喜ぶやうに出来るのぞ、何もかも神ぬに供へてからと申してあるがな、山にお川にも野にも里にも家にも、それぞれに神祀れと申してあるがな、ここの道理よく分らんか。神は知らしてやりたいなれど、今では猫に小判ぞ、臣民神にすぎれば、神にまつはれば、その日からよくなると申してあるが、何も六ヶ敷いことではないぞ、神は無理は言はんぞ、この神示読めば分る様にしてあるのだから役員早う知らして縁ある臣民から知らして呉れよ。印刷出来んと申せば何もしないで居るが、印刷せいで知らすこと出来るぞ、よく考えて見よ、今の臣民、学まなに囚へられて居ると、まだまだ苦しい事出来るぞ、理屈ではますます分らんやうになるぞ、早う神まつれよ、上も下も、上下揃えてまつりて呉れよ、てんし様を拝めよ、てんし様にまつはれよ、その心が大和魂ぞ、益人のます心ぞ、ますとは弥栄のことぞ、神の御心ぞ、臣民の心も神

の御心と同じことになって来るぞ、世界中一度の唸<sup>うな</sup>る時が近づいて来たぞよ。八月の二十八日、㊦のひつ九のかみふで。

## 第二十二帖（一〇二）

まつりまつりと、くどく申して知らしてあるが、まつり合はしさへすれば、何もかも、うれしうれしと栄える仕組で、悪も善もないのぞ、まつれば悪も善ぞ、まつらねば善もないのぞ、この道理分りたか、祭典と申して神ばかり拜んであるやうでは何も分らんぞ。そんな我よしでは神の臣民とは申せんと、早うまつりて呉れと申すこと、よくきき分けて呉れよ。われがわれがと思ふてゐるのは調和てみぬ証拠ぞ、鼻高となればポキンと折れると申してある道理よく分らうがな、この御道は鼻高と取りちがひが一番邪魔になるのぞと申すのは、慢心と取りちがひは調和の邪魔になるからぞ。ここまでわけて申さばよく分るであらう、何事も真通理が第一ぞ。八月二十九日、㊦の一二㊦。

## 第二十三帖（一〇三）

世界は一つになったぞ、一つになって神の国に攻め寄せて来ると申してあることが出て来たぞ。臣民にはまだ分るまいなれど、今に分りて来るぞ、くどう気づけて置いたことのいよいよが来たぞ。覚悟はよいか、臣民一人一人の心も同じになりて居ろがな、学と神の力との大戦ぞ、神国の神の力あらず時が近うなりたぞ。今あらはすと、助かる臣民殆どないから、神は待てるだけ待ちてゐるのぞ、臣民もかあいいが、元をつぶすことならんから、いよいよとなりたら、何んなことありても、ここまでしらせてあるのざから、神に手落ちあるまいがな。いよいよとなれば、分っていることなれば、なぜ知らさぬのぞと申すが、今では何馬鹿なと申して取り上げぬことよく分つてゐるぞ。因縁のみたまにはよく分るぞ、この神示読めばみたまの因縁よく分るのぞ、神の御用する身魂は選りぬいて引張りて居るぞ、おそし早しはあるなれど、いづれは何うしても、逃げてもイヤでも御用さすようになりて居るのぞ。北に気づけよ、東も西も南も何うする積りか、神だけの力では臣民に気の毒出来るのぞ、神と人との和のはたらきこそ神喜ぶのぞ、早う身魂みがけと申すことも、悪い心洗濯せよと申すことも分かるであらう。八月三十日、㊦の一二か三。

## 第二十四帖（一〇四）

富士を目ざして攻め寄する、大船小船あめの船、赤鬼青鬼黒鬼や、おろち悪狐を先陣に、寄せ来る敵は空蔽ひ、海を埋めて忽ちに、天日暗くなりけり、折しもあれや日の国に、一つの光現はれね、これこそ救ひの大神と、救ひ求むる人々の、目にうつれるは何事ぞ、



攻め来る敵の大將の、大き光と呼応して、一度にドツと雨ふらす、火の雨何んぞにたまるべき、まことの神はなきものか、これはたまらぬ兎も角も、生命あつての物種と、兜を脱がんとするものの、次から次にあらわれぬ、折しもあれや時ならぬ、大風起こり雨来り、大海原には竜巻や、やがて火の雨地震ひ、山は火を吹きどよめきて、さしもの敵も悉く、この世の外にと失せにけり、風やみ雨も収まりて、山川静まり国土の、ところどころに

しろ きぬ

白衣の、神のいぶきに甦る、御民の顔の白き色、岩戸ひらけぬしみじみと、大空仰ぎ神

ひざまづ

を拝み、地に跪き御民らの目にすがすがし富士の山、富士は晴れたり日本晴れ、普字は

一八十

晴れたり岩戸あけたり。八月の三十日、㊦の一の二の㊦。

## 第二十五帖（一〇五）

世界中の臣民はみなこの方の臣民であるから、殊に可愛い子には旅させねばならぬから、どんなことあつても神の子ざから、神疑はぬ様になされよ、神疑ふと気の毒出来るぞ。いよいよとなりたら、どこの国の臣民といふことないぞ、大神様の掟通りにせねばならんから、可愛い子ちゃとて容赦出来んから、気づけてゐるのぞぞ、大難を小難にまつりかへたいと思へども、今のやり方は、まるで逆様ざから、何うにもならんから、いつ気の毒出来ても知らんぞよ。外国から早く分りて、外国にこの方祀ると申す臣民沢山出来る様になりて来るぞ。それでは神の国の臣民申し訳ないであろがな、山にも川にも海にもまつれと申してあるのは、神の国の山川ばかりではないぞ、この方世界の神ぞと申してあろがな。裸になりた人から、その時から善の方にまわしてやると申してあるが、裸にならねば、なるやうにして見せるぞ、いよいよとなりたら苦しいから今の内ざと申してあるのぞ。凡てをてんし様に獻げよと申すこと、日本の臣民ばかりでないぞ、世界中の臣民みなてんし様に捧げなならんのぞぞ。八月の三十日、㊦のひつ九のか三。

## 第二十六帖（一〇六）

戦は一度おさまる様に見えるが、その時が一番気づけねばならぬ時ぞ、向ふの悪神は今度は㊦の元の神を根こそぎ無きものにしてしまふ計画であるから、その積りでフンドン締めて呉れよ、誰も知れんやうに悪の仕組してゐること、神にはよく分りてゐるから心配ないなれど、臣民助けたいから、神はじつところへてゐるのぞぞ。八月の三十日、㊦のひつ九の㊦。

## 第二十七帖（一〇七）

神の堪忍袋切れるぞよ、臣民の思ふやうにやれるなら、やりて見よれ、九分九厘でグレンと引繰り返ると申してあるが、これからはその場で引繰り返る様になるぞ。誰もよう行かん、臣民の知れんところで何してゐるのぞ、神には何も彼も分りてゐるのぞと申してあ

ろがな、早く兜脱いで神にまつはりて来いよ、改心すれば助けてやるぞ、鬼の目にも涙ぞ、まして神の目にはどんな涙もあるのぞぞ、どんな悪人も助けてやるぞ、どんな善人も助けてやるぞ。江戸と申すのは東京ばかりではないぞ、今の様な都会みなエドであるぞ、江戸は何うしても火の海ぞ。それより外やり方ないと神々様申して居られるぞよ。秋ふけて草木枯れても根は残るなれど、臣民かれて根の残らぬやうなことになりても知らんぞよ、神のこのふみ早う知らしてやって呉れよ。八と十八と五月と九月と十月に気づけて呉れよ、  
二二  
これでこの方の神示の終りぞ、この神示は富士の巻として一つに纏めておいて下されよ、今に宝となるのぞぞ。八月の三十日、㊦のひつ九㊦。（富士の巻了）